2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第8回「ライストリュゴネス族」(2020.10.25)

【読書会参加に当たってのお願い】

- 13:00から13:25まではZoom操作の練習時間とします。音声や映像、Zoom機能に関連して試してみたいことがあれば、お知らせ下さい。
- 途中参加・途中退出OKです。
- 画面のスクリーン・ショット撮影について
- 第一部の録音・録画について
- スライド中で柳瀬尚紀訳『ユリシーズ』（河出書房新社）を引用するにあたっては、「U-Y 挿話番号.ページ数」で表記します。

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第8回「ライストリュゴネス族」 (2020.10.25)

- 13:00-13:30 …… 準備：Zoomの練習・操作案内
- 13:30-13:40 …… ご挨拶「本読書会について」
- 13:40-14:50 …… 第1部：主催者発表（平繁・南谷・小林）
- 14:50-15:10 …… 休憩
- 14:50-15:50 …… 第2部：グループディスカッション１
- 15:50-16:10 …… 休憩
- 16:10-17:20 …… 第3部：フロアディスカッション２
- 17:20-17:30 …… ご挨拶・第９回読書会について
- 17:30-19:00 …… 懇親会＋Wandering Books

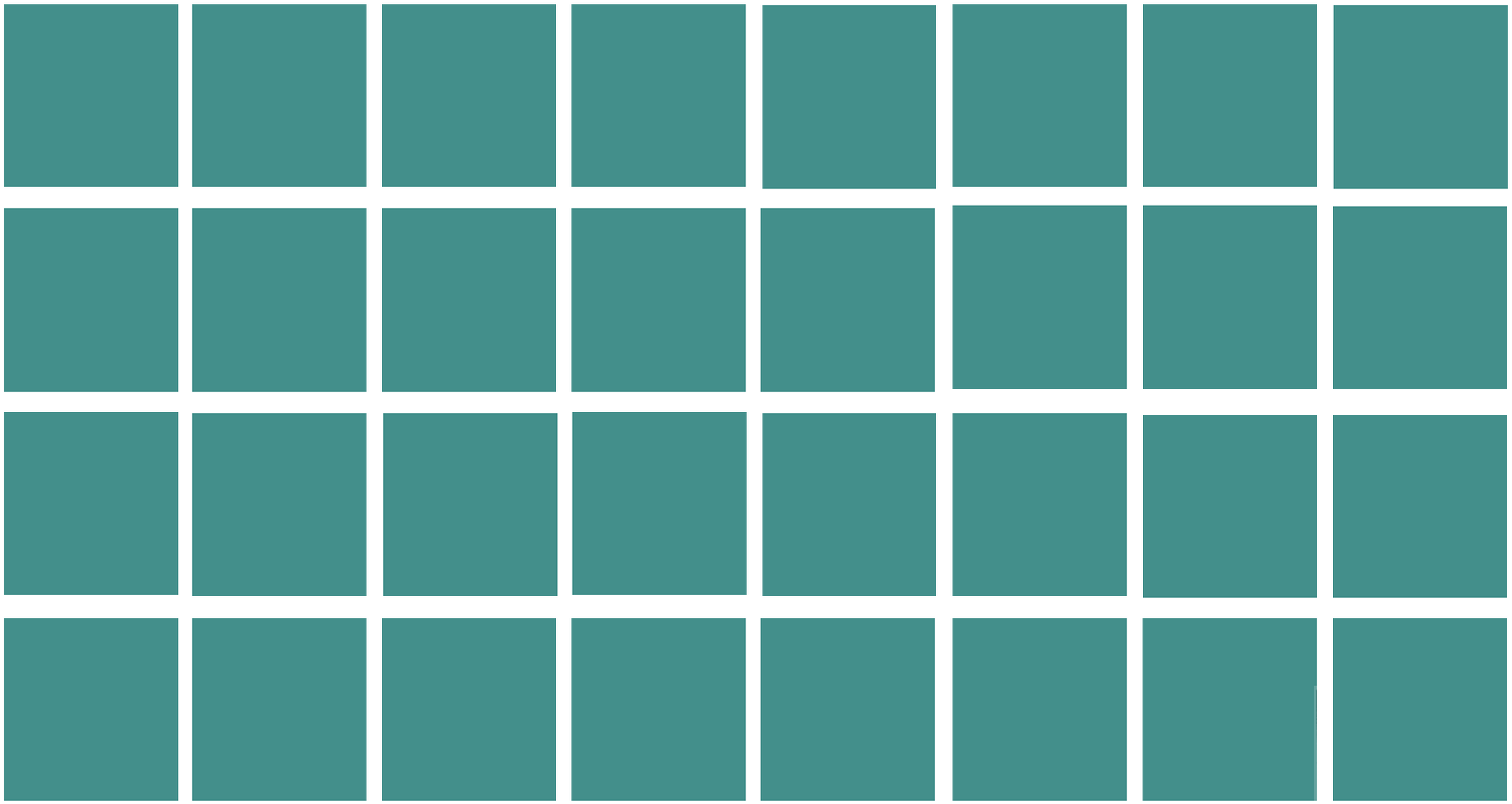
STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第8回「ライストリュゴネス族」(2020.10.25)

第1回 2019年6月16日	第4挿話　カリュプソー	Book II. Odyssey	initial style
第2回 2019年8月25日	第1挿話　テレマコス	Book I. Telemachia	initial style
第3回 2019年10月20日	第2挿話　ネストール	Book I. Telemachia	initial style
第4回 2019年12月22日	第3挿話　プロテウス	Book I. Telemachia	initial style
第5回 2020年2月9日	第5挿話　食蓮人たち	Book II. Odyssey	initial style
特別回 2020年4月26日	特別回　第1挿話～第5挿話	Book II. Odyssey	initial style
第6回 2020年6月28日	第6挿話　ハデス	Book II. Odyssey	initial style
第7回 2020年8月23日	第7挿話　アイオロス	Book II. Odyssey	initial style
第8回 2020年10月25日	第8挿話　ライストリュゴネス族	Book II. Odyssey	initial style
第9回 2020年12月6日	第9挿話　スキュレとカリュブディス	Book II. Odyssey	initial style
第10回 2021年2月	第10挿話　さまよう岩々	Book II. Odyssey	initial style
第11回 2021年4月	第11挿話　セイレーン	Book II. Odyssey	
第12回 2021年6月	第12挿話　キュクロプス	Book II. Odyssey	
第13回 2021年8月	第13挿話　ナウシカア	Book II. Odyssey	
第14回 2021年10月	第14挿話　太陽神の牛	Book II. Odyssey	
第15回 2021年12月	第15挿話　キルケ	Book III. Nostos	
第16回 2022年2月	第16挿話　エウマイオス	Book III. Nostos	
第17回 2022年4月	第17挿話　イタケ	Book III. Nostos	
第18回 2022年6月16日	第18挿話　ペネロペイア	Book III. Nostos	

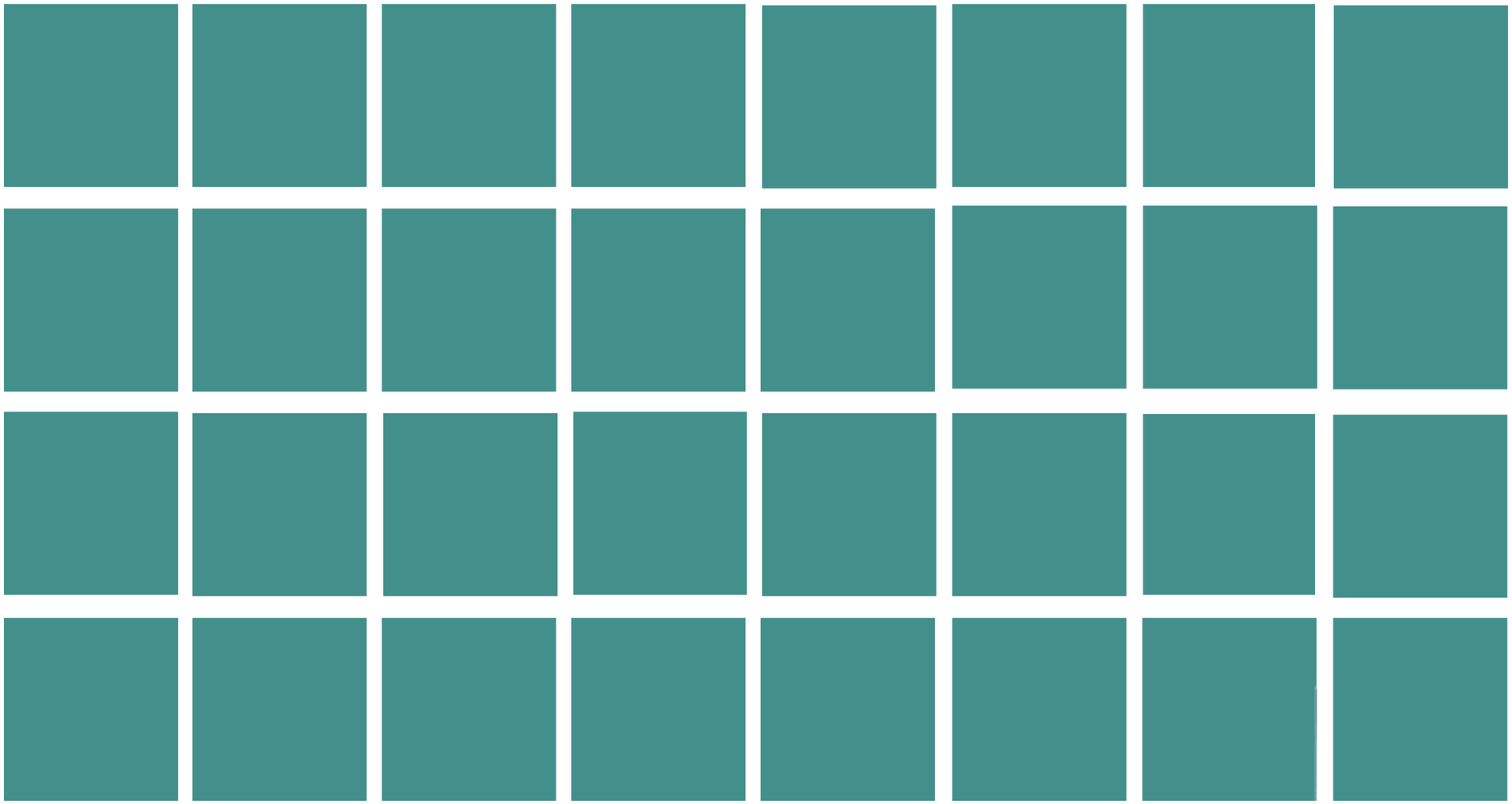
STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

Episode 1: Telemachus



“ふんぞり返って、ふくらかなバック・マリガンが階段のてっぺんへ現れた。捧げ持つ石鹸の泡立つ丸い器にのせて、手鏡とカミソリが十文字に…”（U-Y 1. 11）

Episode 2: Nestor



“—さあ、コクラン、なんという市が遣いを送った？” “—タレントゥムです。”
“よろしい。それで？” “—戦争になりました。” “よろしい。どこで？” (U-Y 2. 49)

Episode 3: Proteus

海	波	砂	貝	風	浜	潮	浜
馬	犬	女	男	馬	鴎	鳩	神
目	耳	靴	足	口	歯	臍	洟
死	産	詩	韻	巴	触	汚	溺

“可視態の不可避の様式。少なくともそれ、それ以上ではないにしても、おれの目を通しての思考。万物の署名をおれはここで読み取る”（U-Y 3. 73）

Episode 4: Calypso

猫	肉	食	臓	糞	便	紙	読
牛	乳	血	環	尻	肥	秘	隠
朝	鐘	金	猶	緩	庭	夫	妻
陽	絵	会	魂	出	鍵	失	閨

“リアポウルド・ブルーム氏は禽獣の臓物をうまがる男である。どろっとしたもつがらスープもいいし、こりこりする砂肝、詰め物をして焼いた心臓….”（U-Y 1. 11）

Episode 5: Lotus Eaters

郵	喪	花	茶	東	屍	温	浮
酔	香	水	植	歩	帽	光	沈
紙	聖	性	馬	猫	薬	歌	浴
式	棒	車	喫	煙	石	賭	体

“荷台車の連なるサー・ジョン・ロジャースン船寄せ通りをブルーム氏は粛々と歩いた。ウィンドウミル小路を過ぎ、リークス亜麻仁加工所、郵便電報局を過ぎる…”（U-Y 5. 127）

Episode 6: Hades

肉	血	骨	土	体	臓	心	爪
牛	馬	蹄	犬	鼠	蛆	花	草
屠	回	揺	埋	腐	解	交	流
列	噂	車	父	食	黒	帽	雨

“マーティン・カニンガムが、まず先に、シルクハットの頭をギッーと軋む馬車の中へ差し入れ、するりと乗り込んで席におさまった…”（U-Y 6. 155）

Episode 7: Aeolus

風	機	音	輪	山	詩	煙	教
電	話	止	転	塔	種	弁	学
肺	騒	馬	車	回	鍵	逆	空
心	血	鉄	樽	像	交	字	?

“ネルソン記念柱の前で路面電車は徐行し、待避線に入り、トロリーポールの移動をすませ、そうして発車する。ブラックロック、キングズタウン、ドーキー行き…”（U-Y 7. 203）

Episode 8: Lestrygonians

食	吐	歯	臭	鼻	業	環	水
視	盲	口	痛	血	蝿	輪	流
飢	鴎	疫	牛	肉	交	唇	穴
触	臓	汚	屠	骨	想	時	門

“パイナップル氷砂糖、レモン棒飴、バター飴玉。粗目糖顔の娘がクリスチャン・ブラザーズの男にせっせとクリームボンボンを掬っている。小学校のお楽しみ会だろか。ぽんぽんによくないよ。…”（U-Y 8. 261）

第1部 主催者発表　第８挿話のフルコース

STEPHENS
WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

肉

——菜食主義の店で食べてきたな。菜粗と果物だけ。ビフテキは食べない。食べようものならその牛の目が未来永劫つきまとう。（U-Y 8.284)

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

【肉】プラムトリー印のミートパテー文字とイメージの食べ合わせ

「やっこさんの思いつく広告といったらプラムトリー印のミートパテ［瓶詰め肉］と同じようなものだ、訃報欄の下、冷肉欄の下にもってくるなんて。」（U-Y 8.267）
His ideas for ads like Plumtree’s potted under the obituaries, cold meat department. (U 8.138-39)

「ミートパテ。お宅にはないですってプラムトリー印のミートパテ？ならば不備（Incomplete）。あほな広告だよ。それも訃報欄の下に入れたとは。腐乱ぷらん無印になっちまう。ディグナムの肉パテ。」（U-Y 8.292）
Potted meats. What is home without Plumtree’s potted meat? Incomplete. What a stupid ad! Under the obituary notices they stuck it. All up a plumtree. Dignam’s potted meat. (U 8.742-45)

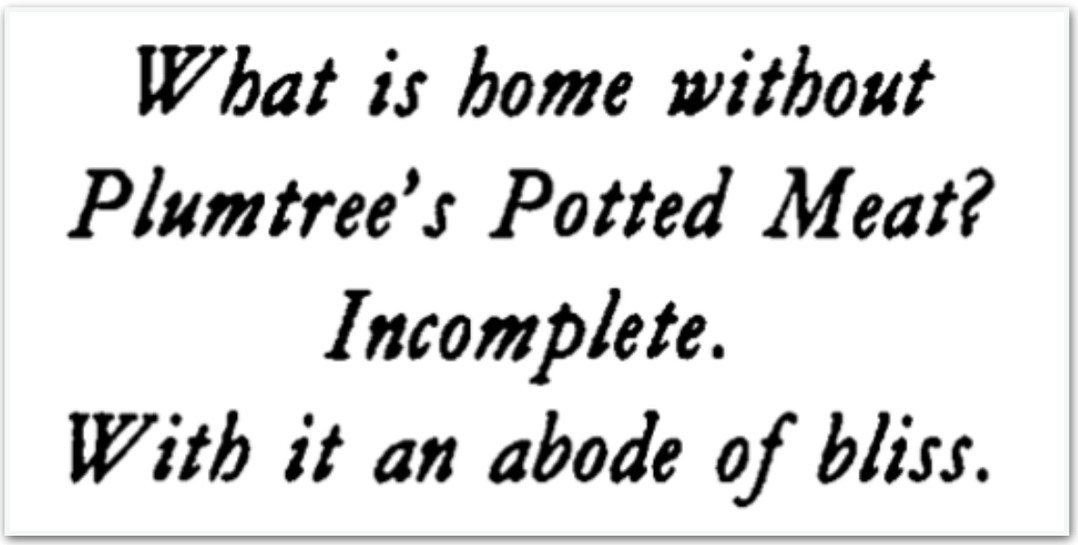


image: “Joyce Project” http://www.joyceproject.com/notes/050016pottedmeat.htm

→広告取りのブルームは、言葉やイメージの配列に敏感で、隣り合うだけで「関係」をもってしまう力学、「文字とイメージの食べ合わせ」に言及している。この後の挿話でも、プラムトリー印のミートパテは繰り返し言及され、重要な意味を帯びる。

【肉】生産と消費の間で―第８挿話における肉の記述

つまりは菜食主義のけっこうな匂いもなかなかおおいになんせ大地の恵みもっとも大蒜は後で臭うイタリア人の手回しオルガン弾きぱりぱり玉葱茸トリュフ。動物の苦痛 (1) ってこともある。鳥の羽を毟って内蔵を引きずり出す。あの家畜市場の哀れな動物たちは屠畜斧で脳天を叩き砕かれるのを待つだけ (2) 。もぉぉぉ。可哀そうに。打ち震える子牛たち。めぇぇぇ。よちよち歩きのちびべこ。牛キャベ炒め。屠畜人のバケツにぶよんぶよんの肺臓（Butchers' buckets wobbly lights.） (3) 。その鈎の胸肉よこせ。どてん。生首やら血まみれ骨やら。皮を剥がれたガラス眼の羊たちが腰から吊るされ、血まみれ紙ぐるぐる巻鼻面ジャムを大鋸屑に滴らせる (4) 。独楽が止まる。傷つけんなよ、小僧。（U-Y 8.291）

（1）動物の苦痛：屠殺の方法について
（2）ブルームのかつての職場での経験
（3）不可食部や畜産副産物の利用法
（4）生産と消費の懸隔ー屠殺の現場や、血や排泄物・死体などのnuisanceを都市の景観と消費者から隠す、19世紀に進行した "the Great Separation"の問題。（cf. Peter Atkins, Animal Cities: Beastly Urban Histories, 2016）

Image: "The Butcher and a Poleaxe Illustration for Manners, Customs, and Dress during the Middle Ages and during The Renaissance Period" (Paul Lacroix, Manners, Customs, and Dress during the Middle Ages and during the Renaissance Period. D Appeleton, 1874. p. 124)

【肉】生産と消費の間で―第８挿話における肉の記述

つまりは菜食主義のけっこうな匂いもなかなかおおいになんせ大地の恵みもっとも大蒜は後で臭うイタリア人の手回しオルガン弾きぱりぱり玉葱茸トリュフ。動物の苦痛 (1) ってこともある。鳥の羽を毟って内蔵を引きずり出す。あの家畜市場の哀れな動物たちは屠畜斧で脳天を叩き砕かれるのを待つだけ (2) 。もぉぉぉ。可哀そうに。打ち震える子牛たち。めぇぇぇ。よちよち歩きのちびべこ。牛キャベ炒め。屠畜人のバケツにぶよんぶよんの肺臓（Butchers' buckets wobbly lights.） (3) 。その鈎の胸肉よこせ。どてん。生首やら血まみれ骨やら。皮を剥がれたガラス眼の羊たちが腰から吊るされ、血まみれ紙ぐるぐる巻鼻面ジャムを大鋸屑に滴らせる (4) 。独楽が止まる。傷つけんなよ、小僧。（U-Y 8.291）

（1）動物の苦痛：屠殺の方法について
（2）ブルームのかつての職場での経験
（3）不可食部や畜産副産物の利用法
（4）生産と消費の懸隔ー屠殺の現場や、血や排泄物・死体などのnuisanceを都市の景観と消費者から隠す、19世紀に進行した “the Great Separation”の問題。（cf. Peter Atkins, Animal Cities: Beastly Urban Histories, 2016）

→家畜市場にいた頃は毎朝、囲いの中でモーモー啼く牛、烙印を押した羊、糞をべちゃッぼたッと落として、そんな敷藁を飼育業者がブーツの底釘をガチャガチャいわせながら踏みつけて歩き、熟れ肉の尻っぺたをぺたんぺたん叩いては、こいつは特上、生木の鞭を振り回していた。（U-Y 4. 108）

→ブレイディ路地に皮剥ぎ手伝いの少年がでれんと立っていた。くず肉のバケツを腕にぶらさげ、ひしゃげた吸いさしのタバコを吸っている。（U-Y 5.127）

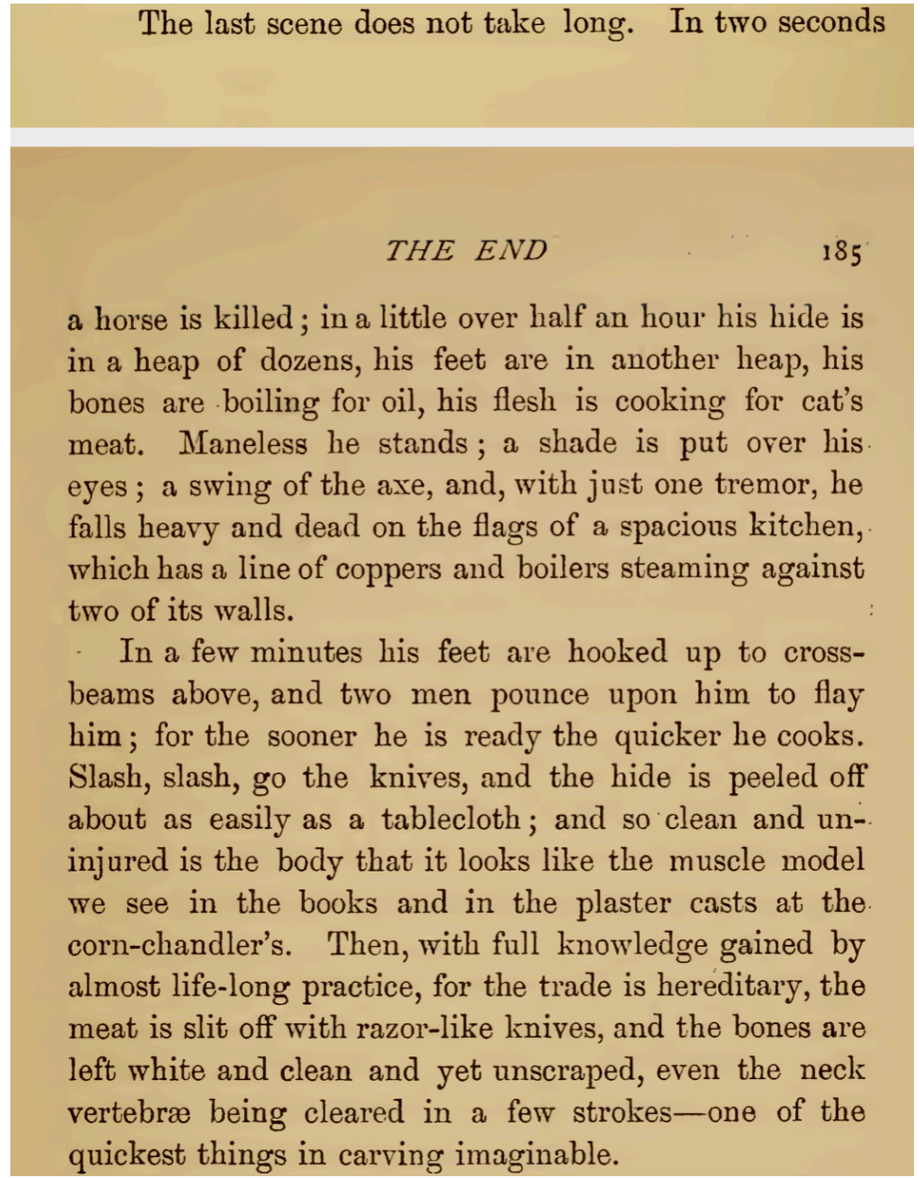
→腎臓が柳模様の皿の上でじくじく血をしたたらせている。（U-Y 4. 107）
→血滲みのちらしをふわっと猫に落としてやり、じゅうじゅう溶け出したバターの真ん中へ腎臓を落とす。（U-Y 4. 113）

→木曜日だからな。明日が屠畜の日。 孕み牛。カフは一頭二十七ポンドくらいで売ってたっけ。たぶんリヴァプール行きだろう。英国伝統のローストビーフ。 肉づきのいいのはすべて買い占められる。それで残ったのは行き場なし。どれも何かの原料になるだけ。皮、毛、角。 一年たまれば大変な量になる。死肉の取引。鞍し革や石鹸やマーガリンになる屠畜場の副産物。（U-Y 6.172）

【肉】生産と消費の間で―第８挿話における肉の記述

つまりは菜食主義のけっこうな匂いもなかなかおおいになんせ大地の恵みもっとも大蒜は後で臭うイタリア人の手回しオルガン弾きぱりぱり玉葱茸トリュフ。動物の苦痛 (1) ってこともある。鳥の羽を毟って内蔵を引きずり出す。あの家畜市場の哀れな動物たちは屠畜斧で脳天を叩き砕かれるのを待つだけ (2) 。もぉぉぉ。可哀そうに。打ち震える子牛たち。めぇぇぇ。よちよち歩きのちびべこ。牛キャベ炒め。屠畜人のバケツにぶよんぶよんの肺臓（Butchers' buckets wobbly lights.） (3) 。その鈎の胸肉よこせ。どてん。生首やら血まみれ骨やら。皮を剥がれたガラス眼の羊たちが腰から吊るされ、血まみれ紙ぐるぐる巻鼻面ジャムを大鋸屑に滴らせる (4) 。独楽が止まる。傷つけんなよ、小僧。（U-Y 8.291）

（1）動物の苦痛：屠殺の方法について
（2）ブルームのかつての職場での経験
（3）不可食部や畜産副産物の利用法
（4）生産と消費の懸隔ー屠殺の現場や、血や排泄物・死体などのnuisanceを都市の景観と消費者から隠す、19世紀に進行した "Great Separation"の問題。（cf. Peter Atkins, Animal Cities: Beastly Urban Histories, 2016）



The last scene does not take long. In two seconds

THE END 185

a horse is killed; in a little over half an hour his hide is in a heap of dozens, his feet are in another heap, his bones are boiling for oil, his flesh is cooking for cat's meat. Maneless he stands; a shade is put over his eyes; a swing of the axe, and, with just one tremor, he falls heavy and dead on the flags of a spacious kitchen, which has a line of coppers and boilers steaming against two of its walls.

In a few minutes his feet are hooked up to cross-beams above, and two men pounce upon him to flay him; for the sooner he is ready the quicker he cooks. Slash, slash, go the knives, and the hide is peeled off about as easily as a tablecloth; and so clean and uninjured is the body that it looks like the muscle model we see in the books and in the plaster casts at the corn-chandler's. Then, with full knowledge gained by almost life-long practice, for the trade is hereditary, the meat is slit off with razor-like knives, and the bones are left white and clean and yet unscraped, even the neck vertebræ being cleared in a few strokes—one of the quickest things in carving imaginable.

図１　Knacker's yardでの馬の解体場面と畜産副産物の利用方法。Gordon, W. J. Horse-World of London. Religious Tract Society, 1893, pp. 184-85.

【紅茶】The Dotted or Dotty?

Y.M.C.A (U 8. 5) 「キリスト教青年会」（Young Men's Christian Association）(U-Y 8. 261, 277)
Iron Nails Ran IN. [I.N.R.I] (U 8. 21)　「鉄の釘は打ち込まれたり」(U-Y 8. 262)
£.S.d. (U 8. 38): pounds, shillings and pence
on the q.t. (U 8.100)　「こっそり」(U-Y 8. 265)
H. E. L. Y. s ’ (U 8. 126)　ヒーリー文具店のサンドウィッチマン　(U-Y 8. 267)
U.P. (U 8. 258) (U-Y 8. 273)　デニス・ブリーンに送りつけられたカードに書かれてあった文字。
A.E. (U 8, 352); “A.E: what does that mean?” (U 8.527)　(U-Y 8. 276) George Russelの筆名。
R.C. (U 8. 337)　「羅加」(U-Y 8. 276)
t.t. (U 8. 366)　(U-Y 8. 277)　絶対禁酒主義者
D.B.C. (U 8.510) (U-Y 8. 283)　Dublin Bakery Company

ーーWho is he if it's a fair question? Mrs Breen asked. Is he dotty?”
ーーHis name is Cashel Boyle O’Connor Fitzmaurice Tisdall Farrell. (U 8.301-03)

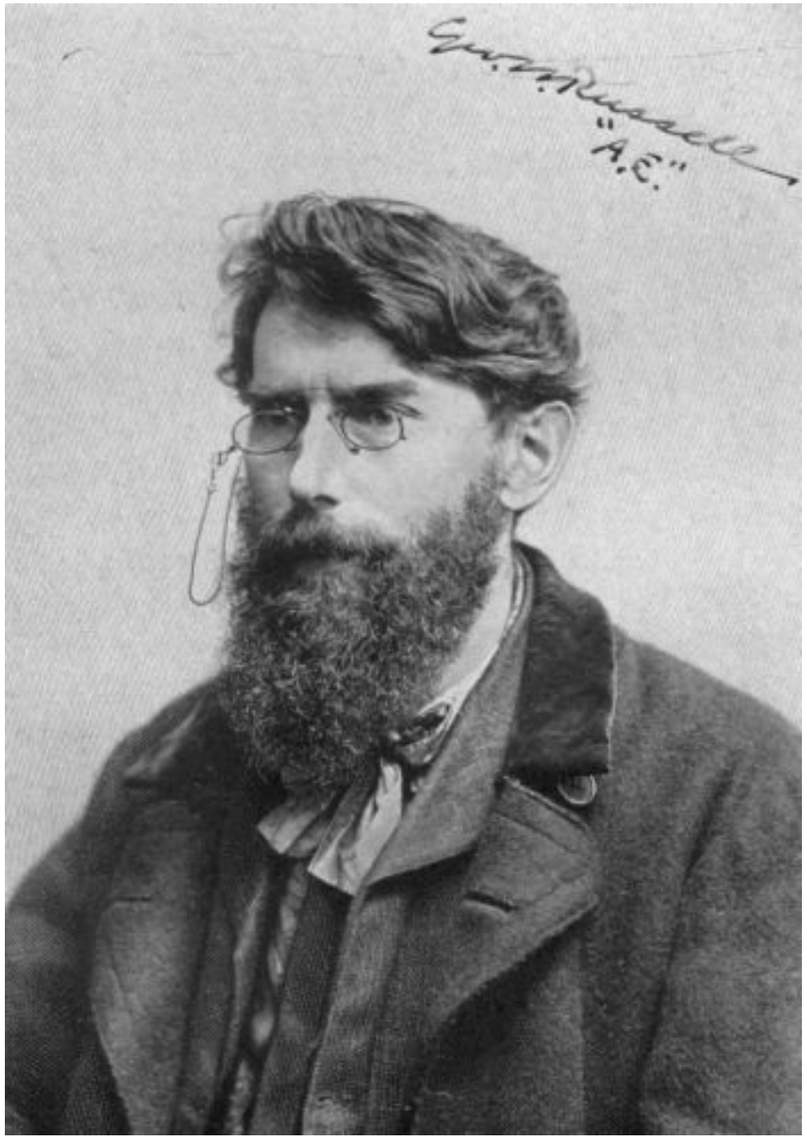
→事物・人物や組織、行為や出来事は、言及を容易にする頭字語やイニシャル、符牒になることで、そのインパクトや個性、身体を希薄なものにしてしまう。ブルームがA.Eに関して、what does that mean?と述べているように、知らない人間には、省略される前の実体が見えない（しかしだからこそ別の意味をもちうる; cf. U.P., HCE, ALP）。一方で、省略されてもよさそうなほどに長い名前をもつ、奇人として有名であった人物**Cashel Boyle O’Connor Fitzmaurice Tisdall Farrell**は“dotty”にならない。

【紅茶】The Dotted or Dotty?

A.E.のペンネームは神智学に傾倒していたラッセルの関心から、“aeon”に由来している。ジョイスはブルームに”What does that mean?”とわざわざ問いかけさせているが、実は、その答えを右の文章のなかにこっそりと書き込んでいる。文字として隠された「A.E.」を発見してみましょう。

poet, Mr Geo. Russell. That might be Lizzie Twigg with him. A. E.: what does that mean? Initials perhaps. Albert Edward, Arthur Edmund, Alphonsus Eb Ed El Esquire. What was he saying? The ends of the world with a Scotch accent. Tentacles: octopus. Something occult: symbolism. Holding forth. She's taking it all in. Not saying a word. To aid gentleman in literary work.

His eyes followed the high figure in homespun, beard and bicycle, a listening woman at his side. Coming from the vegetarian. Only weggebobbles and fruit. Don't eat a beefsteak. If you do the eyes of that cow will pursue you through all eternity. They say it's healthier. Windandwatery though. Tried it. Keep you on the run all day. Bad as a bloater. Dreams all night. Why do they call that thing they gave me nutsteak? Nutarians. Fruitarians. To give you the idea you are eating rumpsteak. Absurd. Salty too. They cook in soda. Keep you sitting by the tap all night.



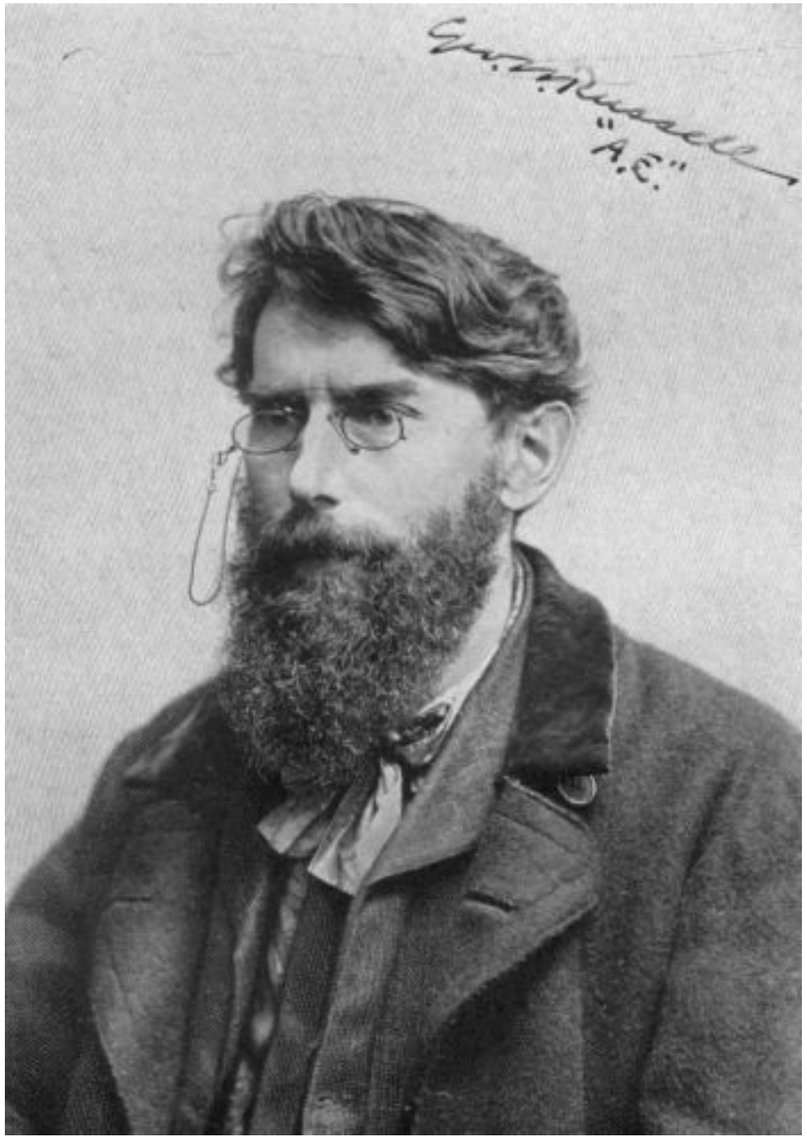
George Russel (1867-1935)

【紅茶】The Dotted or Dotty?

A.E.のペンネームは神智学に傾倒していたラッセルの関心から、“aeon”に由来している。ジョイスはブルームに“What does that mean?”とわざわざ問いかけさせているが、実は、その答えを右の文章のなかにこっそりと書き込んでいる。文字として隠された「A.E.」を発見してみましょう。

poet, Mr Geo. Russell. That might be Lizzie Twigg with him. A. E.: what does that mean? Initials perhaps. Albert Edward, Arthur Edmund, Alphonsus Eb Ed El Esquire. What was he saying? The ends of the world with a Scotch accent. Tentacles: octopus. Something occult: symbolism. Holding forth. She's taking it all in. Not saying a word. To aid gentleman in literary work.

His eyes followed the high figure in homespun, beard and bicycle, a listening woman at his side. Coming from the vegetarian. Only weggebobbles and fruit. Don't eat a beefsteak. If you do the eyes of that cow will pursue you through all eternity. They say it's healthier. Windandwatery though. Tried it. Keep you on the run all day. Bad as a bloater. Dreams all night. Why do they call that thing they gave me nutsteak? Nutarians. Fruitarians. To give you the idea you are eating rumpsteak. Absurd. Salty too. They cook in soda. Keep you sitting by the tap all night.



George Russel (1867-1935)

A.E.=AEON=all eternity

STEPHENS WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies

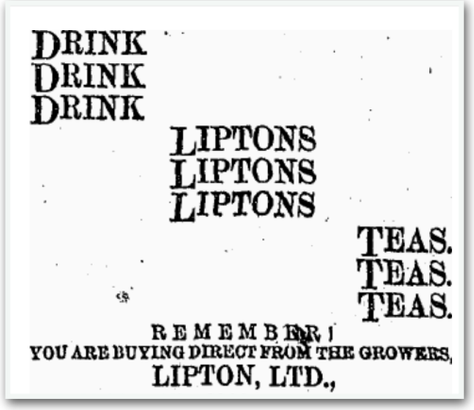
【紅茶】広告表現を模倣する現実ー第８挿話で三度繰り返される語句の意味は？

“Is Coming. Is Coming. Is Coming.” (U 8.15)　**來らん! 來らん!! 來らん!!!**（U-Y 8 261）※!マークの数に注目。
“Dth, dth, dth” (U 8.373)　ちッ、ちッ、ちッ！（U-Y 8. 278）
“Tea. Tea. Tea.”(U 8. 373)　紅茶。そうだ、紅茶、紅茶。（U-Y 8. 277）⇔ t.t. (U 8. 366) 絶対禁酒主義者
bom. bom. bom (U 8. 624)
Men, Men, Men.（U 8. 653）男、男、男。（U-Y 8. 288）
“no teeth to chewchewchew it” (U 8. 660)　噛み噛み噛むには歯がないときた。（U-Y 8.289）
“Kill! Kill!” (U 8. 703) (U-Y 8 291)

【紅茶】広告表現を模倣する現実ー第８挿話で三度繰り返される語句の意味は？

“Is Coming! Is Coming!! Is Coming!!!” (U 8.15)　**來らん! 來らん!! 來らん!!!**（U-Y 8 261）※!マークの数に注目。
“Dth, dth, dth” (U 8.373)　**ちッ、ちッ、ちッ！**（U-Y 8. 278）
“Tea. Tea. Tea.”(U 8. 373)　紅茶。そうだ、紅茶、紅茶。（U-Y 8. 277）⇔ t.t. (U 8. 366) 絶対禁酒主義者
bom. bom. bom (U 8. 624)
Men, Men, Men.（U 8. 653）男、男、男。（U-Y 8. 288）
“no teeth to chewchewchew it” (U 8. 660)　噛み噛み噛むには歯がないときた。（U-Y 8.289）
“Kill! Kill!” (U 8. 703) (U-Y 8 291)

19世紀の新聞・雑誌では制限された広告欄の紙幅のなかで、capitalizeした文字を反復させる表現が存在した。効能や安さ、高品質など、商品の性質をメッセージとして届ける以前に、「文字」として目立ち、「文字」として群れることで“Something to catch the eye”になろうとする。こうした広告表現は、すでに第５挿話でブルーム自身や第７挿話の新聞の見出し句（ef. K.M.A）によって説明されていた。



The Irish Times, July 20, 1900, p, 2.

> He eyed the horseshoe poster over the gate of college park: cyclist doubled up like a cod in a pot. Damn bad ad. Now if they had made it round like a wheel. Then the spokes: sports, sports, sports: and the hub big: college. Something to catch the eye. (U 5. 550-54)

The Irish Times , February 16, 1888, p.1.

→“Is Coming! Is Coming!! Is Coming!!!”は、チラシ（throwaway）の中の文字列。“Men, Men, Men”は目の前の光景を広告の見出し語のように描写したブルームの職業的実践。

【紅茶】All in one

A procession of whitesmocked sandwichmen marched slowly towards him along the gutter, scarlet sashes across their boards. (U 8.123-24)

A squad of constables debouched from College street, marching in Indian file. (U 406-07)

Vinegar hill. **The Butter exchange band.** (U 8.437-38)

James Stephens' idea was the best. He knew them. **Circles of ten** so that a fellow couldn't round on more than his own ring. (U 8.457)

Mr Bloom walked on again easily, seeing ahead of him in sunlight the tight skullpiece, the dangling **stickumbrelladustcoat**. (U 8.315-16)

For her birthday perhaps. **Junejulyaugseptember** eighth. (U 8. 629-30)

Men, men, men. (U 8.653)

0, the big **doggybowwowsywowsy**! (U 8. 849)

“Davy Byrne **smiledyawnednodded** all in one:
-Iiiiiichaaaaaaach! (U 8. 969)

2022年の『ユリシーズ』―スティーヴンズの読書会
第8回「ライストリュゴネス族」(2020.10.25)

次回の第9回読書会（第9挿話：スキュレーとカリュブディス）は12月6日（日）にオンラインで実施します。具体的な日程と予約開始日はtwitter（@YMINAMITANI）とStephens Workshopのホームページでお知らせします。

よろしければ後ほど別途送付しますアンケートフォームにご記入いただき、workshop.stephens@gmail.comまでご返送ください。本日はご来場いただき、ありがとうございました。

STEPHENS
WORKSHOP
A Critical Directory of Joyce & Irish Studies